

避難所における子どもへのレクリエーション支援が心理的安定に与える影響
—発達段階に応じた支援ガイドラインの作成—

24GM007

要約

本研究は、筆者が学部時代から実施してきた児童ボランティア経験を基に災害時の避難所における子どもの心理的安定に着目し、特にレクリエーション支援の役割とその具体的な在り方について検討することを目的として行った。日本は自然災害の発生が多い国であり、避難所生活を余儀なくされる子どもも少なくない。そのような環境下において、子どもが受ける心理的影響は大きく、適切な支援の必要性が指摘されてきた一方で、避難所現場では子ども支援に関する具体的な指針が十分に整備されているとは言い難い状況がある。

本研究ではまず、災害時における子どもの心理的特徴や反応について、先行研究を基に理論的に整理した。その結果、子どもの不安やストレスの表出の仕方は発達段階によって異なり、乳幼児期には泣きやすさや分離不安、学童期には身体症状や怒り、思春期には過敏反応や自責感と、いった形で現れることが明らかとなった。こうした特徴を踏まえた支援が行われなければ、子どもの心理的負担が長期化する可能性があることを確認した。

次に、避難所におけるレクリエーション支援の意義について先行研究を基に理論的に検討した。そこでは、レクリエーションは子どもを楽しませるための活動にとどまらず、安心感の回復や感情表出の促進、日常性の再構築といった心理的側面に大きく寄与する支援であることが分かっていた。これらを基に本研究では、特別な技術や設備を必要としないレクリエーションであっても、子どもの心理的安定に一定の効果が期待できることがわかった。

これらの検討を踏まえた本研究では、過去の実際の児童支援実践事例と理論課題との検討を通じて、災害時の避難所において活用可能な子ども支援ガイドラインを作成した。本支援ガイドラインは、発達段階別に支援の視点を整理し、具体的なレクリエーション内容や支援者の関わり方、注意点を示した点に特徴がある。また、専門職に限らず、避難所運営に関わる多様な支援者が実践できる内容とすることで、現場での活用を意識した構成とした。

さらに、現場ニーズとの比較や実践・運用上の課題についても検討を行った。その結果、本支援ガイドラインは、具体性や実行可能性といった点で現場のニーズと一定の整合性がある一方で、人員不足や環境制約、支援者間の理解度の差といった課題も存在することが明らかとなった。これらの課題を踏まえ、本ガイドラインは固定的に用いるものではなく、現場の状況に応じて柔軟に活用されるべきであることを示した。

以上のように、本研究は災害時の避難所における子どもの心理的安定を支える支援の在り方を理論的に整理し、それに基づいてレクリエーション支援を軸とした実践的な支援ガイドラインを開発した点に意義があるといえる。本研究の成果は、今後の避難所運営において、子ども支援をより重視した体制づくりを進めるための一つの基礎資料となることが期待される。